

SSKO

Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC

Grow up!!

栃木ダルク

ニュースレター 第56号(2007. 11. 10)

メンバーとプログラムの変化

栃木 DARC 代表 栗坪千明

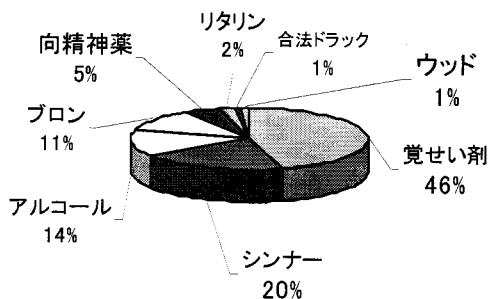
秋冷の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。日ごろは栃木ダルクへのご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今回は栃木ダルクの近況報告をしたいと思います。季節柄か入寮者ラッシュが続いています。ラッシュといっても10人や20人が押し寄せるわけではありませんが、ビギナーが増えています。那須TCも宇都宮OPもほぼ定員に近い状態になりました。これも栃木ダルクの活動が一般の方に浸透してきている証であろうと、ありがたく思っています。活動を始めて4年半でやっと軌道に乗った感があります。

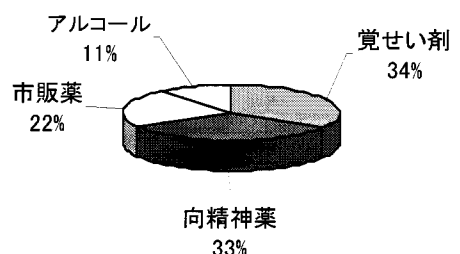
この4年半で私たちスタッフの考え方、プログラムへの取り組み方、また新しいことへの挑戦など変化をし続けていますが、入って来るメンバーも開設当初と比べるとかなり変化してきています。

まず使用薬物の割合ですが、昨年度までのデータと比べると大きな違いがあります。昨年度までは覚せい剤が46%と約半数を占めていたのに対し、今年度は34%と減っています。それに対して、昨年度までは7パーセント程だった向精神薬が33%と大幅に増え、12%だった市販薬も22%に増えています。アルコールは大体昨年度までと大幅な変化は無く、11%でした。

昨年まで



19年度



この結果から施設として考えなくてはならないことは、向精神薬が増えているということです。薬物の種類によっては回復率がどうかという話は抜いて書きますが、使用薬物の変化によりメンバーのパーソナリティ面において若干の違いはあるように思います。まず学歴の変化が見られます。以前は中学卒業、高校中退者が多かったのに対し、最近では専門学校卒、短大、4年制大学卒という高学歴者の入寮が多く見られます。この点から薬物依存に学歴は関係ないということが実証されたものとも言えるかもしれません。このように入寮してくるメンバーが広範多岐にわたることから、プログラムを変化させる必要はあるのかなと思います、今年になってからは特に後半の4・5のステージでのプログラムで随分と新しいものを取り入れました。

まずは、ソーシャルミーティングというプログラムで、現代社会の諸事情について、ニュースや新聞などの中からテーマを決め、話し合います。今まで自分以外のことに関心なく、いいほど興味の無かった人たちが、社会のことに対して徐々に意見を持っていくというのはプログラムを実施しているスタッフにも見て取れ、スタッフ側も見ていて気持ちの良いものです。

次にウィークリーセッションというプログラムです。これは内観療法に多少通じるものがあるかと思います。一週間ごとに自分の内面で変えていきたいもの問題点をあぶり出し、どの程度クリアしたかという評価をし、何週間かかけて改善していくというものです。これには自分についての洞察が必要になります。自分の問題にも無関心なメンバーも多いので、慣れるまでに時間が掛かりますが、最近ではスタッフも慣れてきたのか自分の問題点を理解するようになって来ました。

これらのプログラム以外にもいくつか新しいものを開拓しました。まだまだ改良の余地はあるし、入ってくるメンバーによってこれからも変化し続けていくことでしょう。私達も日々新しい情報を入手していくことと、スキルアップを続けて行きたいです。

アルコールに無力

依存症のヤマチャン

私が、他の人達と酒の飲み方が違うと感じ始めたのは、33才を過ぎた頃だった。その当時、私は、ごく普通のサラリーマン生活を送っており、酒飲みではあったが、酒に問題があるという認識はなかった。ところが、朝から酒に手を出し、昼にも飲み、一日中飲むようになり、最終的には、禁断症状を押えるために飲むようになった。要するに、酒なしでは生きることができない状態になっていた。

そうなるもブレーキを踏んでも止まらない車と同じで、暴走は止まらず、一度休職して復職したものの、「飲める体に戻ったな」と思うだけで、さらに拍車がかかり、ブラックアウトもたび重なるようになり、結局は失業した。

何のあてもなくふる里に帰ったが、アルコール問題だけが進行する結果となった。最初は実家の家族ともめた。失業保険が支給されている期間は、実家で十数年ぶりに過ごした。短期間の帰省ではない上に、酒びたりの生活、異常行動、暴言、ウソ、言い訳、早い話が家族を巻き込んでしまった。その後は、ご多聞にもれずしりぬぐいを条件に絶縁。40才を過ぎて突き放しを受ける事となった。さらに、仕事の面でも長続きはせず、業種を変えようと職種を変えようと結果はすべて同じであった。じわりじわりと追い詰められていった。もはや、地元にも自分の居場所はなくなり、自分の強い意志で酒はやめられると思い、最後の会社をクビになったのを機会に、これまた、逃げるようにして再上京した。

さて、東京には戻ったものの何のあてもなく飯場のタコ部屋をわたり歩く生活が続いたが、糖尿病の悪化とともに体力の限界を痛感し、救急搬送されたところは、何と結核の隔離病棟だった。今どき結核などという病気がまだあるのかと思ったが、まさか自分がかかるとは思ってもみなかったので、二重のおどろきだった。「山の病院」というイメージを持っていたが、現実には都内の駅前近くの住宅地に存在した。イメージと現実との違い、今になって考えると、アル中という言葉のイメージとアルコール依存症という現実との違いに通じるものがあると思う。

とにかく、この時点で福祉の対象となり、生活保護を受けることができた。結核の場合、長期間の入院となる。しかも何もしない。何もしない空白の時間ができると、アルコールが友人のような顔をして静かに忍び寄ってくる。

ストレプトマイシンという特効薬の投与期間が過ぎた頃、散歩の途中で最初の一杯に手を出してしまった。理由はよくわからない。とりわけ飲みたいわけでもなかったが、とりあえず、「飲んだ」。それがまたすべてののはじまりとなった。つまり「飲める

1976年2月25日第三種郵便物認可（毎週4回月曜・火曜・木曜・金曜発行）

2007年11月13日発行 SSKO 通巻第6564号

体に戻った」というふりだしに戻ったわけで、過去の失敗、経験がまるで生きていない、そして「自分には過去がない」というような感覚が生まれて、ひたすらアルコールを求め、アルコールの支配を望む人間に変わってしまう。その支え手も会社、家族、病院と替わったが、ただ変わらなかったのはアルコールだけだった。

その後も何回かの入退院を繰り返し、都内の保護施設を転々としていたが、去年の末頃より連続飲酒状態となってしまった。救急搬送と警察の保護室の常連となり、病院によっては、名前と生年月日を言っただけで、「アンタの来る病院ではないですよ」と門前払いをされるようになった。

このような体験を通して「底つき」を感じたようだ。出口のないまどろみに長い間つかっていて、気がつけば同じところをグルグルまわる迷路の中で疲れ果ててしまった。私の場合、劇的な体験というよりも、慢性的な飲酒自殺をしていたようだ。強い自殺願望はないが、この世に居場所がないという感覚、やけばちシラケタで感覚、ムキになる性格等がまざりあった状態でまどろみに救いを求め、すがりついたのがアルコールだったという気がする。アルコールに罪は無く罪があるのは自分にあったと気が付いた。アルコールそのものは単なる薬物であり、飲めば万人に効くドラッグに他ならない。飲酒による肉体的な生理的変化が記憶の中に刻印され、反復されることで自我機能に多大な影響を与える結果となる。簡単に言えば、アルコールに救いを求めればアルコールに支配されてしまう。少なくとも私はそうだった。完全に支配されたので「まいった」と言って白旗を上げたのである。題名に上げた「無力」とはこういう意味である。

ところで、無条件降伏をした私は、都内のアルコール病棟に入院を許され、回復への第一ステップを踏み出すこととなった。自分が本物のアルコール依存症者だと心の底から認めること。病院にしても施設にしてもこの前提からすべてが始まると思う。特に、アルコール病棟では、気づかされるが多かった。

アルコールがひき金になってはいるが、人格的な問題がその根っこになっている事実を見せつけられた。本質的には健康な人間であったからアルコール問題という修復可能な形で表現できたという考え方にも共感した。要するに「進行性のある病気だが、回復は可能」だと思った。アルコールに無力ということを認めることが回復する有力な動機付けになっていると現在では信じている。

11月4日に、カホン・ガムでお世話になっているウクレレの方たち
のご好意で黒磯河川敷公園にてバーベキューを開いていただきました。
総勢40名ほどが集まり楽しい一日が過ごせました。

感謝



11月予定表

- 11/2 喜連川社会復帰促進センター見学
- 11/3 ダックス栃木講演
- 11/4 黒磯バーベキュー参加
- 11/11 氏家バザー参加
- 11/18 とちぎアクションフォーラム参加
- 11/23 黒羽刑務所矯正展参加
- 11/25 宇都宮家族会

10月献金を下さった方々

箕輪隆光様、木村亮一様、アクション栃木家族会
佐藤病院 佐藤勇人様
匿名8名様

10月献品を下さった方々

樋口良二様、カリック白河教会様、聖血礼拝修道院様
アクション栃木家族会、田川久男様、森文男様
山口絵美様、岡山美枝子様
匿名2名様

編集

栃木DARC

宇都宮OP

那須TC

〒320-0014

〒329-3225

栃木県宇都宮市大曾 2-2-14
形松ビル 3F

栃木県那須郡那須町豊原丙 3227-2

TEL 028-650-5582 FAX 650-5597 TEL 0287-77-7157 FAX 77-7158

ホームページアドレス <http://www.t-darc.com>

Eメール:nesm@t-darc.com

発行所

郵便番号一五七―〇〇七三 東京都世田谷区砧六―二六―二一
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価100円